

呉禄貞と日本（1）

——呉禄貞に関する伝記史料をめぐって——

李 慶 国

Wu Luzhen（呉禄貞）and Japan（1）：
A Study on Wu's Biographical Materials

Qingguo Li

は じ め に

呉禄貞（1880. 3. 6～1911. 11. 7）は、字は綏卿、号は娛園、別名は夢澤雄。湖北省雲夢呉家台子（現在の孝感市）出身で、十七歳で湖北武備学堂に入り、軍事を学んだ。1899年1月¹⁾、湖広総督張之洞の推薦により、清国政府の官費留学生として来日し、日本陸軍士官学校の予備校成城学校に入学した。在学中、彼は孫文と知り合い、孫文の革命主張に共感し、「興中会」²⁾のメンバーとなった。1900年8月、孫文の指示に従って一時帰国し、自立軍の大通蜂起を率いた³⁾。蜂起が失敗した後、呉は日本に戻り、陸軍士官学校で学業を続けた。1901年11月、陸軍士官学校を卒業し、近衛騎兵聯隊に入隊して実習を行った。1902年4月、同期の卒業生と帰国し、張之洞の下で軍務に携わり、湖北将弁学堂総教習、護軍総教習、武昌武備学堂会弁などに勤めた。その間に、呉禄貞は秘かに革命活動に参加し、武昌花園山に連絡拠点を設けた。1904年2月、黄興、宋教仁らと「華興会」⁴⁾を結成した。同年5月陸軍士官学校の後輩（第二期生）・禁衛軍統領良弼の推薦により上京、練兵処軍学司訓練科騎兵監督に赴任した。1907年7月、呉禄貞は東北三省総督徐世昌と共に奉天（瀋陽）へ赴き、軍事参議となり、後に延辺へ派遣された。彼は「間島」⁵⁾の辺務紛争を調査し、周維楨、李恩榮⁶⁾及び六人の測量員と、労苦をいとわず、千三百余キロメートルを歩いて国境を調査した。その実地調査や歴史文献資料を元にして『調査延吉辺務報告書』⁷⁾を書きあげ、日本との領土問題交渉のために、有利かつ重要な文献を提供した。三年間の長い辺務交渉中、呉禄貞は前後して陸軍正参領、辺務帮弁、督弁を歴任した。1909年9月日本は清国政府と「間島に関する協約」⁸⁾を調印することにより、「間島」といわれた延辺地域を清国の領土と認めた。これは1840年アヘン戦争以来、領

土問題交渉の諸案件のなかで唯一の外交上の勝利といってもよい。呉の貢献はいうまでもなく、彼の短い人生の中で最大の功績といっても過言ではない。ここでは全面的に呉禄貞の伝記を紹介するのではないので、その後を省略したい。

今迄、呉禄貞に関する伝記や研究論文は数多くあるが、しかし、彼の日本の成城学校や陸軍士官学校での留学時代のことについては、不明な点や誤った記載が多くある。誤った伝記史料として広く伝えられてきたものもある⁹⁾。筆者は日本にいた呉禄貞と関わる史料について、国立国会図書館、外務省外交史料館、成城中学校・高等学校（前身は陸軍士官学校予備校）校友会・史料室などで資料調査をし、解読作業を行ってきた。本論文は、発表された各種の呉禄貞伝記の中から、主に成城学校や陸軍士官学校に関する部分の誤記を訂正し、また新しく発見した史料の披露をするものである。

I. 成城学校と清国留学生教育

『成城学校百年』によれば、成城学校の前身は、明治17年（1884）12月、東京の京橋区築地三丁目十一番地に創立された文武講習館であった。1886年1月、牛込区市谷加賀町二丁目三十三番地に移転、9月成城学校と改称し、陸軍士官学校、陸軍幼年学校の予備教育を担うことになった。1891年8月、牛込区原町三丁目八十七番地（現在新宿区原町）に移転された¹⁰⁾。川上操六校長¹¹⁾が積極的に留学生を受け入れることを主張し、1898年6月、留学生部が設置され、成城学校の留学生教育をスタートさせた¹²⁾。「成城学校沿革史稿」に、当初留学生教育の発足が次のように述べられている。

その時に当り参謀次長にして本校校長たる川上操六氏は戦後に於ける日支関係の一日も忽にすべからざるを察し、清国の開発には一にその青年子弟に新教育を施にあるとなし、之を彼地の官紳に謀りたるに概ね此の議に賛せり。これが、ために参謀本部には清国学生管理委員設置され、本校はこの管理委員の委託によりその留学生教育を行ふこととなれり。之れ本校留学生部の起源にして、我国に於ける清国留学生の嚆矢たり。¹³⁾

この年の3月、湖広総督張之洞は、『勸学篇』を著わした。その中の「遊学第二」では、「遊学の国にいたりては、西洋は東洋に如かず」と主張し、日本へ留学することの必要性、路程が短くて費用も少ない、また漢字を使うなどの利点を力説した¹⁴⁾。6月、清朝政府は張之洞の『勸学篇』を各省に頒布し、日本の学校への視察や留学生の派遣を命じた。成城学校が最初に留学生を受け入れたのは、実は清国留学生ではなく、韓国の留学生であった。「成城学校沿革史稿」の「第二編、成城学校留学生部」に、以下の内容が記されている。すなわち1895年11

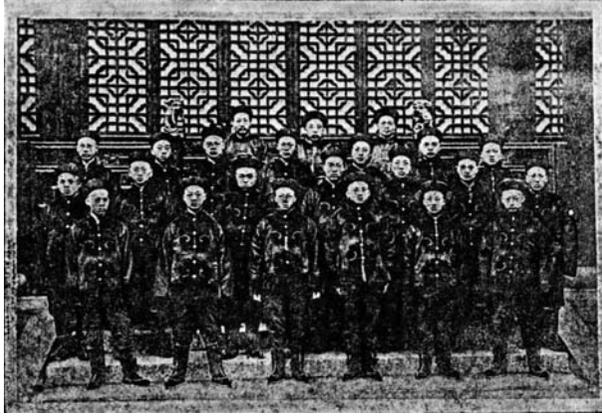


図1 1899年1月湖広総督張之洞より派遣された清国留学生。
出国前に撮った写真で1列左から4人目が呉禄貞。(『辛亥武昌起義』、文物出版社1986年6月より)

月、韓国人留学生(士官)八名の委託を受け入れる。翌年1月、韓国の陸軍士官一名及び留学生二名が入学したが、1902年12月第三回の卒業生を以て韓国人留学生の受け入れは中止された¹⁵⁾。清国留学生が最初に成城学校に入ったのは、1898年6月20日、浙江省巡撫廖壽豊¹⁶⁾より派遣された譚興沛(26歳、湖南省茶陵州人)、徐方謙(31歳、湖北江夏県人)、蕭星垣(25歳、湖南省善化县人)、段蘭芳(23歳、湖南省茶陵州人)の四人である。徐方謙の他はすべて湖南省の出身者である¹⁷⁾。1898年7月清国留学生教育が正式に開始されてから、ほぼ毎年清国留学生が入ってきて、しかもそのほとんどが官費留学生であった。しかし、義和団事件や辛亥革命などの影響で一時途絶し、留学生の数が激減した時期もある。成城学校には、陸軍士官学校の予備校として最初陸軍士官学校の志望者ばかりが入ってきた。1902年7月に「成城学校入学事件」¹⁸⁾が起き、陸軍が別に振武学校¹⁹⁾を作り、陸軍士官学校への志望者を振武学校に移したため、成城学校は留学生の収容を一時中止した。しかし留学生の強い要望があったため、また文科の学生教育をすることになった²⁰⁾。

成城学校出身の著名な教育家である呉玉章²¹⁾は回憶録『辛亥革命』で、「成城学校の規律が非常に厳格で、学習指導もよい」、「この学校はたしかに優れていた。授業は厳格で、生徒は全部寄宿して、外出は水曜と土曜の午後と日曜だけゆるされた。教員の素質も良好で、指導も極めて熱心であった」²²⁾と述べている。

筆者が成城中学校・高等学校校友会・史料室で見つけた清国留学生に関する資料の中に成城学校幹事長(後に校長になった)奥山三郎²³⁾が書いた「清国浙江派遣陸軍学生学術授業進歩景況報告」(明治32年7月29日、図2)がある。これは、成城学校に入学してほぼ一年経った浙江省巡撫廖壽豊派遣の四名の清国留学生の学習や生活などについての報告であり、次のように書かれている。



図2 明治32年7月29日成城学校幹事長奥山三郎より「清国浙江派遣陸軍学生學術授業進歩景況報告」の原物の写真（筆者撮影、2015年7月）

其学科課程ノ豫定ノ如ク進歩シ各学生モ亦能ク勉励セシヲ以テ其成績概ネ佳良ナリト雖モ未タ深く日本語文ニ通曉スル能ハサルヲ以テ学理ニ因リテ推究スヘキモ、若クハ読書力ヲ要スル学科ノ如キハ其成績充分ナラサルモノアリ

この「報告」書と付録の「清国浙江派遣陸軍学生一学年末學術試験評点」は、その四名の留学生を派遣した浙江巡撫か清国駐日公使へ送るべきものだったのか、また学校に保管されるべきものだったのか不明であるが、当時の清国留学生の学習成績が「佳良」で、彼らの各科目は予定の通りに進捗し、また読書力を要する科目にも彼らの日本語は充分であるという教育成果を物語っているものである²⁴⁾。

辛亥革命までに成城学校に在学した清国留学生は年々増え、ピーク時の1908年には、二百八十三名に達した。『成城学校校友会名簿』の「支那学生名簿」に、1900年（明治33年）7月の第一回から1916年（大正5年）3月の第三十回にかけて掲載された中国人留学生の卒業生は六百二十五名に上る。また、『日本留学中国人名簿関係資料』第六巻「日本陸軍士官学校・中華民国留学生名簿」にも日本陸軍士官第一期から第三十一期までの中国人留学生の卒業生は千六百三十八人であるとの記録がある²⁵⁾。その卒業生の中に中国の辛亥革命や民国初期の軍事教育などに多大な貢献をされた将校が多くある²⁶⁾。

II. 成城学校在籍時の呉禄貞

II.1 来日と成城学校入学の時期

1899年1月（光緒24年旧暦12月）、湖北・南洋（湖広総督張之洞と両江総督劉坤一）より派遣の三十三名の官費留學生が成城学校に入学した。その中には湖広総督張之洞から派遣された武備学堂と両湖書院の學生が十九名おり、呉禄貞はその中の一人である²⁷⁾。これまでの呉禄貞の伝記に関する著書や論文などでは、ほとんど二十名と書いてあるが、実はもう一名は張厚琨といい、張之洞の長孫であり、彼は成城学校に入らず直接に学習院に入学した²⁸⁾。成城中学校・高等学校校友会・史料室に保管された『清国留學生原籍簿』（第1号）（「留學生に關スル届書控」、明治32年10月作成）には、張厚琨の名前は載っていない。

日本の外務省外交史料館の外交文書で、この件について最初に記載されたものは、「機密第六十六号」明治31年（1889）12月17日付の総領事（在上海）代理小田切萬壽之助より外務次官都筑馨六宛の「湖北総督張之洞ヨリ學生派遣ノ件 並ニ当館ヨリ書記生一名、東京迄同行セシムル件具稟」という公信である。そのなかに張総督が両洋と打合わせのうえ、至急留學生を派遣することと決定したことが記されている。また、湖北より二十名、北洋より十余名、南洋より二十名の留學生を派遣する旨が書かれているが、総人数は明示されていない²⁹⁾。その後、この件について、明治31年（1898）12月26日付の青木外務大臣より參謀総長宛の公信、明治32年（1899）1月10日付の青木外務大臣より桂陸軍大臣宛の公信、明治32年（1899）1月12日付の小田切総領事代理より青木外務大臣宛の電報などもある³⁰⁾。清国より派遣された留學生は全部で四十名、そのなかで、三十三名が軍事修業のために成城学校に入り、四名が法学修業、二名が師範学校、一名が学習院に入学することが明らかになった。明治32年（1899）1月4日付の在漢口二等領事瀨川浅之進より外務次官都筑馨六宛の公信第一号（受第692号）には次のように書かれている。

今般湖北総督部下ヨリ本邦へ派遣ノ武備學習學生二十名は武昌織布局譯官鄺国華之ヲ監督シ本月七日ノ便船ニテ當地出發ノ筈ニ有之候
右學生ハ両湖書院并ニ武備学堂ノ學生中ヨリ試験ノ上選抜シタルモノニシテ大抵ハ秀才又ハ秀才ト同様ノ學識ヲ具アルモノ、由ニ有之候別紙記載ノ劉邦驥以下九名ハ両湖書院、高曾介以下十名ハ武備学堂出身ニシテ最後ニ記スル張厚琨ト云フハ張総督ノ長孫ナル由ニ有之候 右及御報告ヲ 敬具

明治三十二年一月四日

在漢口

二等領事瀬川淺之進

外務次官都筑馨六殿

別紙：

劉邦驥 湖北人、吳元澤 湖北人、田吳焯 湖北人、吳茂節 安徽人、盧靜遠 湖北人、顧臧 廣東人、吳祖蔭 湖北人、劉賡雲 湖北人、鐵良 荊州駐防旗人；高曾介 直隸人、吳紹璘 湖南人、徐傳篤 江蘇人、鄧承拔 湖北人、杜鍾岷 貴州人、易甲鵬 湖南人、傅慈祥 湖北人、吳禄貞 湖北人、文華 荊州駐防旗人、萬廷猷 湖北人、張厚琨 直隸人。³¹⁾

この公文書でわかるように、張之洞総督より両湖書院の九人と武備学堂の十人が派遣されていた。別紙には学生達の氏名と出身地が記されている。また、湖北からの二十名のなかでは張厚琨を除いてみな成城学校に入学した。両江総督（南洋大臣）劉坤一より派遣された学生の氏名、出身地、年齢などは、公信第十二号「湖北江蘇派遣学生出發期日及江蘇学生姓名人員並に学資金送付之件」の付録（図3）に載っている。江蘇より派遣された学生は合計二十名、その中の十四名は武備学生として成城学校に入学し、四名は政治法律研究のために適当な学校に、又二名は師範学校に入学する予定であった。江蘇の引率者は通判羅治霖である。武備学生の留学費用は南洋より、それ以外の学生は南洋公学より提供された。湖北と江蘇の派遣学生は上海で合流し、1月14日（旧暦12月3日）に「薩摩丸」にて上海を出港し、神戸に着けば陸行する予定であると書かれている。注目すべきは、両江総督劉坤一に派遣された南洋公学の学生名簿のなかに、後に著名になる人物、弁護士、法学者の楊蔭杭、雷奮と外交官の章宗祥の名が見

章宗祥	年二十一歲	浙江人
雷本會	年二十一歲	江蘇人
以上二名	師範學堂	
胡初泰	年二十一歲	江蘇人
楊蔭杭	年二十一歲	江蘇人
楊廷棟	年十九歲	江蘇人
富士英	年十九歲	浙江人
以上四名	政治法律	
舒厚儀	年十六歲	江蘇人
以上十四名	武備學堂	
陶性孝	年二十三歲	湖南人
張朝基	年十七歲	江蘇人
章遠駿	年十八歲	湖南人
張顯仁	年十七歲	湖南人
吳錫未	年十七歲	浙江人
陳其川	年十七歲	浙江人
杜淮川	年二十歲	安徽人
華汝驥	年十九歲	廣東人
許振英	年十九歲	浙江人
洪基	年二十歲	安徽人

南洋大臣派遣學生姓名
在上海日本總領事館

図3 「湖北江蘇派遣学生出發期日及江蘇学生姓名人員並に学資金送付之件」別紙「南洋大臣派遣学生姓名」（公信第12号）

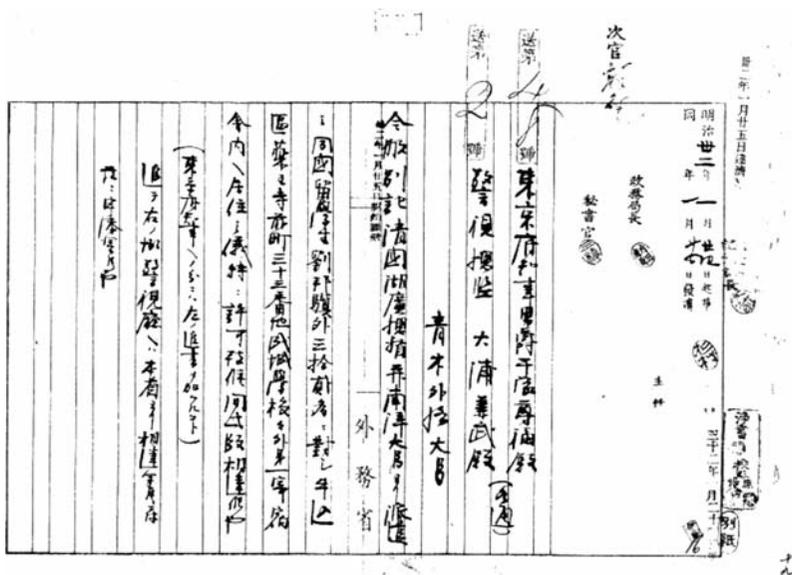


図4 青木外務大臣より東京府知事と警視総監宛の公信（明治32年（1899）1月24日付）

えることである³²⁾。彼らは呉禄貞と同船にて日本にやってきた。

以上のように、日本外交史料館には、多くの公信、照会、電報などが保管されているが、これらの記述の中から、呉禄貞等の清国留学生の来日や入学の時期などがはっきりとわかるようになった。これまでの呉禄貞に関する各種の伝記の中には、1898年12月に来日という説が一番多いが、実はここでの12月とは、西暦ではなく、旧暦である。即ち、武昌織布局翻訳官鄭国華が武備学習の学生を二十名引率し、1899年1月7日（旧暦11月26日）の便船³³⁾にて漢口から上海へ出発し、上海で南洋大臣より派遣された二十名の学生と通判羅治霖と合流し、1月14日（旧暦12月3日）に上海から「薩摩丸」に乗って神戸に向かったのである。彼らは1月18日（旧暦12月7日）朝8時に神戸に到着し、その夜、神戸に一泊して翌日の19日12時半に神戸から汽車で出発、20日（旧暦12月9日）午前9時に東京の新橋に着いた。

呉禄貞は、三十二名の陸軍士官学校を志願した留学生達と東京に着いてから牛込区葉王寺前町三十三番地成城学校校外第一寄宿舍内³⁴⁾に居住することとなった。

図4は、明治32年1月24日（来日の三日後）付の青木外務大臣より東京府知事男爵千家尊福、警視総監大浦兼武宛へ送付した公信であるが、この公信で清国留學生が来日後宿泊したところが明らかにされている。その後のもう一つの公信によれば、呉禄貞らは一ヶ月後の2月28日にまた牛込区市ヶ谷河原町陸軍省所轄地内にある建屋に移転した³⁵⁾。

II.2 成城学校で学んだ授業科目と修業年限

呉禄貞は成城学校でどのような課程を修得したのであろうか、また、修業年限は何年だったの
 であろうか。ここで、外務省外交史料館の公文書「清国学生一年半教育学科配当授業回数表」
 と「清国学生教授学科科目程度表」³⁶⁾を使って紹介しておこう。

下の図5は、「清国学生一年半教育学科配当授業回数表」である。これによって成城学校の
 清国留学生の修業年限、授業回数及び科目名がよくわかる。

まず、呉禄貞の修学年限は一年半であり、すなわち 1899 年 2 月から 1900 年 7 月までであ
 る。夏休みや冬休みのような大型休暇はないようであるが、週の授業時間数は、最初の半年は
 ほとんど二十五時間、二十八時間であり、後の一年間は全て三十時間である。1899 年 2 月と 8
 月には十九時間と十七時間で週の授業時間数がわりと少ないが、水曜、土曜の午後と日曜日を
 除いて一日三時間以上もある。授業科目は日本語（授業の時間数、以下同、合計 384）、日本
 文 (347)、地理と地文 (69)、歴史 (66)、算術 (177)、幾何初歩 (40)、幾何 (112)、代数
 (140)、三角法 (77)、博物初歩及生理衛生 (51)、化学 (58)、物理 (79)、図画 (111)、体操
 (209) などである。日本語と日本文の授業科目に占める割合が大きいことがよくわかる。

もう一つに「清国学生教授学科科目程度表」があるが、その内容は以下のとおりである (表
 1)。

この「清国学生教授学科科目程度表」と「清国学生一年半教育学科配当授業回数表」は、明

図5 「清国学生一年半教育学科配当授業回数表」

表1 「清国学生教授学科科目程度表」(筆者が原本を元に作成した)

学科	程度
日本語	五十音、綴字、単語、単句、會話等ヨリ語法の大意ヲ授ケ
日本文	普通文ノ読み方、訓解及作文ヲ授ケ但シ進歩ノ度ニ應ジ軍事上ニ関スル操典教範要務令等ヲ加フ
地理及地文	万国地理ノ要領並ニ世界地文ノ梗概ヲ授ケ
歴史	世界歴史ノ梗概ヲ授ケ
算術	算用数字、記数法、命数法、整数四則等ヨリ開方及求積ニ至ル
幾何初歩	普通ノ平面形及立体ノ名称及其簡單ノ性質ヲ授ケ
幾何	平面幾何ハ直線、垂線、平行線、平行辺形、角形、円ニ係ル普通ノ諸定理及平易ノ問題ヲ授ケ立体幾何ハ平面、平行面体、柱体、錐体球ノ諸定理ヲ授ケ
代数	整数四則、最簡易ノ因数分解、平易ノ分数等ヨリ二次方程式等ヲ授ケ
平面三角法	単角的平面三角法ニ依リ三角比ノ諸定理、対数表ノ用法、三角形ノ解法等ヲ授ケ、専ラ観測問題ヲ解セシムルヲ以テ目的トス
博物初歩及生理衛生	動植、鑛物ノ区分、通性及人体ノ構造生理及衛生ノ大要ヲ授ケ
化学	無機化学ノ大要ヲ授ケルヲ目的トシ主要諸元素其化合物ヨリ普通金属其化合物ノ梗概ヲ授ケ専ラ実験ニ依リ其知識ヲ開發セシム
物理	力学、静力学、熱学、電気学、光学、音学ノ梗概ヲ授ケ
図画	画学ハ鉛筆画ヲシテ習画帖ニ就キ、簡單ノ器具等ノ類ヨリ漸次ニ複雑ノモノヲ臨写セシヲ稍々其進歩ヲ持チテ簡單ナル実物模写ヲナサシム、図ハ幾何図ヲ授ケ且ツ簡單ナル測図ヲ学ハシム
体操	柔軟体操、器械体操、劍術、銃槍術及各個教練、小隊教練等ヲ授ケ

治 32 年 (1899) 3 月 4 日付の参謀本部第二部長福島安正より外務省政務局長内田康成宛の公信の別紙 1・2 に付けられている報告資料である。そのなかの「清国学生教授学科科目程度表」は、成城学校幹事長である奥山三郎よりの「清国浙江派遣陸軍学生学術授業進歩景況報告」(明治 32 年 7 月 29 日付) の付録「清国浙江派遣陸軍学生授業学科課程程度」と比べてみれば、項目と内容が少し異なることがわかる。後者は項目の中に「歴史」「物理」「博物初歩及生理衛生」がない。また「日本語」と「日本文」が一つにまとめられ、「日本語文」となっている。なぜ違うかわからないが、どちらも簡略に記載されていることがわかる。筆者は成城中学校・高等学校の資料室で「清国陸軍学生四十五名教授学術課程表」³⁷⁾(成城学校、明治 32 年 7 月) を見つけた。その課程表(図 6)には、明治 31 年 6 月 20 日から明治 32 年 5 月 1 日入学までの学生達が在学中に受けた課程名、授業回数、教課及参考用書、教授課程の摘要などの内容³⁸⁾が詳述されている。

次に注目すべきは、当時に使われていた教科書である。「教課及参考用書」欄には次のよう

○典令教範：體操教範、射撃教範、歩兵操典、歩兵工作教範、野外要務令

これらの学校教科書は、科挙を中軸にした中国の伝統教育を抜け出したばかりの清国留学生にとって、新鮮で大きな関心を持たせるものであったに違いない。しかし「成城学校授業科目及程度略表」³⁹⁾と比べてみれば、外国語、国語及漢文、倫理などを除いて、日本人学生が五年かかるものを一年半で終らせるという「速成」の性質を持つことが明らかである。

II.3 呉禄貞の成城学校の卒業成績表

呉禄貞の在学期間中の試験成績に関する資料は、次の一点が残っている。すなわち「清国学生成績表」(明治33年7月)の中の「清国陸軍学生卒業試験成績表」(明治33年7月作成)がそれである。この記録の前には、1898年6月20日に浙江省巡撫廖壽豊より派遣され、最初に成城学校に入学した留学生蕭星垣、段蘭芳、徐方謙の三人の「清国浙江派遣陸軍学生卒業試験成績表」が載っている⁴⁰⁾。その次に明治32年(1899)1月20日、32年3月21日、32年5月1日にそれぞれ入学した四十二名の「清国陸軍学生卒業試験成績表」(図7)がある。四十二名の中には、湖北と南洋より派遣された三十三名(呉禄貞を含む)、北洋より派遣された八人、もう一名の私費留学生が見える⁴¹⁾。成績表の最初の頁に成績評価について、以下のような説明がある。

- 一、本試験ノ成績ハ入学以来数回施行セシ試験評点ノ平均数ニ卒業試験ノ評点ヲ合シテ之ヲニ除セシモノナリ
- 二、総テ試験ノ評点ハ一科一百ヲ以テ満点トシ其優劣ハ左ノ規準ニ由ル
優等 評点 八十ヨリ百
中等 同 七十九ヨリ四十
劣等 同 三十九ヨリ零
- 三、表中教範トアルハ歩兵操典野外要務令等ナリ
- 四、列序ハ学科ノ優劣ニ就テ之ヲ定メ又列序中同平均点ノ者ハ合点数ノ多少ヲ以テ上下セリ
- 五、術科ノ評点ハ柔軟体操器械体操歩兵教練及号令調整ノ平均点ナリ

卒業試験の科目は、日本語、日本文、作文、歴史、地理、算数、代数、平面幾何、平面三角、生理衛生、物理、化学、図学、画学、教範の全部で15科目である。合点、平均点、列序、術科、疾病欠席日数などの項目がある。

呉禄貞の卒業成績は次の通りである。

日本語 88、日本文 77、作文 93、歴史 83、地理 80、算数 82、代数 91、平面幾何 42、平面三

The image shows two pages of a graduation results table for Qing Dynasty Army students. The left page lists scores for various subjects and names. The right page lists names and their scores/ranks. The names listed include 王廷楨, 李甲鵬, 吳禄貞, 張廷錫, etc.

図7 「清国陸軍留学生卒業成績表」(成城学校、明治33年7月)(筆者撮影、2015年7月)

角40、生理衛生82、物理79、化学85、国学88、画学68、教範89、合点1,167、平均点78、序列17、術科77。疾病缺席日数はなし。

呉禄貞の卒業総合成績(平均点)は四十二人の中の上位の第十七位であった。彼の成績は清国留学生の首席・先輩の蕭星垣のそれとわずか三点の差であった。しかも日本語、日本文、作文、歴史、地理、代数、教範などの科目成績は蕭より上である。平面幾何と平面三角、二科目が低いので総合の平均点数にも影響をもたらしたことがわかる。明治44年(1911)11月に日本成功雑誌社より出版された『現代支那四百餘州風雲児』(覆面浪人著)の「清国陸軍の才人 呉禄貞」の一節には、呉禄貞について、「呉は三十二年七月、我が成城学校を優等で卒業した男ださうで、代数が其最も得意とする所であるとか、それから又た日本語には巧みで、快活なる留学生であった、中肉中背の男で、腕白もので、器械體裁が上手であった」⁴²⁾ということが書かれている。

Ⅲ. 陸軍士官学校への入学と卒業帰国の時期

呉禄貞は1900年7月に成城学校を卒業後、一時に密かに帰国して自立軍蜂起に参加した。8月8日(旧暦7月14日)に彼は秦力山と安徽省大通で前軍を指揮して挙兵した。しかし、経費調達の問題で、ほかの自立軍が約束の蜂起時間を延期したうえに、その連絡も遅れたため、

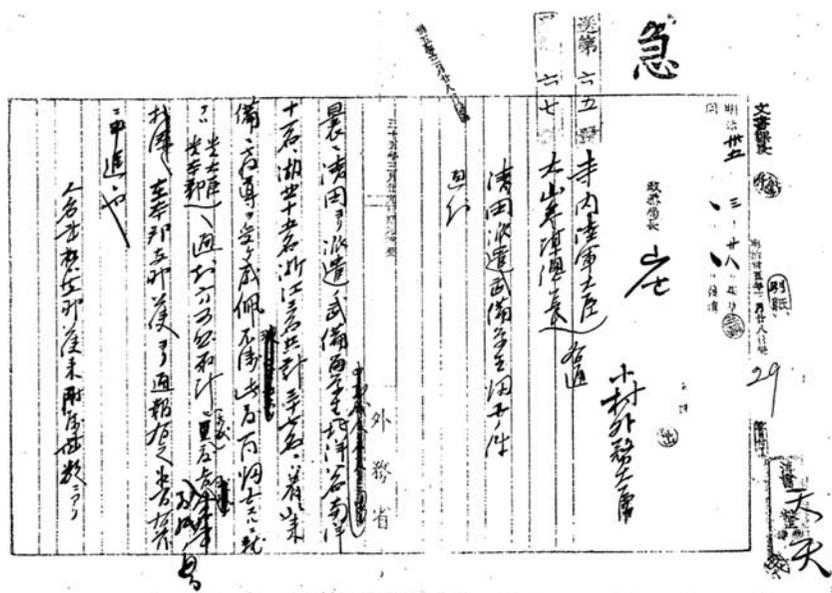


図9 外務大臣より寺内陸軍大臣・大山参謀長宛の公信送 65 号

には呉禄貞の名が見える。

成城学校の清国留学生は入学時期によって修学年月が二年一ヶ月の者、一年六ヶ月の者、一年三ヶ月も者があるが、第一回卒業生三人と第二回卒業生四十一人は同時に卒業し、その四十四名は全員陸軍士官学校の入学・入隊名簿⁴⁶⁾に載せられている。しかし、そのうち、傅崇祥は既に殺害され、洪基も卒業後しばらくして病気で亡くなったの⁴⁷⁾で、陸軍士官学校に入学したのは四十四名ではないはずである。

次に、呉禄貞の帰国の時期については、今までの伝記や論文にはさまざまな説があるが、ほぼ誤りである。呉禄貞は陸軍士官学校を1901年10月上旬に卒業してから、軍事見習のために騎兵聯隊に入って新兵を教えていた。彼は1902年3月に見習修了後、陸軍大学に進学するつもりであったが、実現することができなかった。この意向は彼が汪康年(穰卿)へ送った書簡に示されている。

禄貞以十月初旬卒業陸軍士官学校、当即入彼近衛騎兵聯隊、教彼新兵。帰国之期、大抵在二、三月間耳。禄貞学問既淺、閱歴毫無、即返国亦無補於時局也。是以欲再留学五年陸軍大学校。明年春帰国與否、尚未定⁴⁸⁾。

禄貞は十月初旬頃、陸軍士官学校を卒業したが、直ちに近衛騎兵聯隊に入って新兵を教える。帰国の時期は大抵二月、三月の間である。禄貞は学問が浅くて閱歴も全くないので、

李 慶 国

たとえ帰国しても時局になんの役にも立たないだろう。そのため、さらに陸軍士官大学に五年間留学し続けようと考えている。来年春に帰国するかどうかまだ決まっていない（筆者訳）。

呉禄貞の帰国の時期については、今までの呉禄貞の伝記や研究論文などはよくこの書簡を使って推測されていた。しかし、具体的なデータはない。調べてわかったのが、以下の公信である。

まず、明治35年（1902）3月28日付の小村外務大臣より寺内陸軍大臣・大山参謀長宛の公信第65号（図9）「清国派遣武備学生回国ノ件」には以下のような内容が書かれている。

通知

曩ニ清国ヨリ派遣ノ武備留学生北洋八名、南洋十一名、湖北十五名、浙江三名、共計三十七名ニハ着以来備ニ教導ヲ受ケ感佩不涉此為一同帰国スルニ就イテハ、貴大臣・貴本部へ通知方可然取計ヒ（□□）度旨、蔑視ノ通ル□□在本邦支那公使ヨリ通報有之□□茲ニ申進ノヤ

人名付録（省略）^{49）}

また、もう一つのデータがある。明治35年（1902）3月29日（旧暦2月18日）付けの駐日公使蔡鈞より大日本外務大臣男爵小村壽太郎宛の公信には、次の内容が記されている。

拝啓陳者曩年敝國各省派来

貴国学習武備諸学生備承

教導感佩良深現已卒業将帰国者計北洋八名南洋十一名湖北十五名浙江三名共計三十七名相

應開列清單送上請煩

貴大臣查照並希轉咨

陸軍省及

参謀本部查照施行是為至荷專泐奉達

順頌

日祉

大日本外務大臣男爵小村壽太郎閣下

蔡鈞謹具 申二月十八日

第二十九號

この公信には附名簿として「北洋南洋湖北浙江卒業武備学生回華者清單」が添えられている。

「北洋南洋湖北浙江卒業武備学生回華者清單」

計開

北洋：蔣雁行、張鴻達、李士銳、李澤鈞、賈寶卿、陸錦、王廷楨、張紹曾

南洋：杜淮川、華振基、韋汝聰、許葆英、陳其采、舒厚德、陶嶺孝、張顯仁、張朝基、呉錫永、単啓鵬

湖北：劉邦驥、劉賡雲、呉祖蔭、呉紹璘、呉禄貞、呉茂節、高曾介、鐵良、文華、萬廷猷、顧臧、易甲鵬、呉元澤、盧静遠、鄧承拔

浙江：蕭星垣、段蘭芳、徐方謙⁵⁰⁾

この中に湖北からの十五名の陸軍士官学校の卒業生の名前がある。このうち、「呉禄貞」の名前が載っている。しかし、来日した時のメンバー十九名の中で傅慈祥、杜鍾岷、徐傳篤、田呉焯四名の名前は載せられていない⁵¹⁾。以上の公信より呉禄貞の帰国の時期は1902年4月の初めであること⁵²⁾が分かる。

付記

成城中・高等学校の遠藤護先生や校友会事務局の山地京子様には清国留学生に関する貴重な資料を閲覧させていただくことができ、心より感謝の意を表したい。

注

- 1) 呉禄貞の来日時期については、様々な説があったが、趙宗頌「呉禄貞史事考訂」(『上海師範大学学報』1992年第1期)で、1896年、1897年、1898年、1899年等の諸説の中から、「1898年冬」の説が最も信頼度が高いと推測されている。正確な情報は、1899年1月18日来日、即ち旧暦の1898年12月7日である。
- 2) 「興中会」とは、孫文によって1894年11月24日ハワイのホノルルで創設された、「反清」の革命組織である。興中会のスローガンは「驅除韃虜、恢復中華、平均地権、創立合衆政府」であった。その構成員は華僑や会党員が中心となっていた。1905年、華興会、光復会と合同し、中国同盟会として再編された。呉禄貞が興中会のメンバーであることについて、異なる意見もある。馮自由『革命逸史』初集によると、1900年東京の清国留学生達が「勵志会」を結成し、呉禄貞はそのメンバーの一人であるという。(馮自由著『馮自由回憶録』上、東方出版社、2011年10月版、69頁)。
- 3) 1900年8月8日(光緒二十六年七月十四日)自立軍前軍が安徽大通で起義した。前軍の指揮者は秦力山と呉禄貞であった。その後、経費未達や延期の通達が届かなかった為、計画された唐才常自立軍起義が完全に失敗に終わり、唐才常、傅慈祥(呉の友人、成城学校同期)などの28人が処刑され、呉禄貞は危うく虎口を脱して東京に戻った。
- 4) 「華興会」とは、黄興が中心となり組織された革命団体の一つである。設立の趣旨は「清朝の打倒」と「民主および自由国家の建設」であった。帰国した留学生や国内各学堂の知識階級を中心に500

余名が華興会に参加した。当時最も影響力を有する反清組織である。呉禄貞は1903年11月4日黄興の誕生日の祝賀会に参加し、革命団体設立の協議を行い、翌年2月10日長沙へ赴き、華興会の成立大会に参加した。

- 5) 日本は1907年「日露密約」調印後、中国東三省の既得利益を守り、更に侵攻し、領土を拡大しようとしている。「間島」は元々図們江のなかの砂洲で、それを朝鮮語で「間島」(gan do)と呼ぶ。日本は図們江北の延吉一帯(延辺地区)を中韓領土未定の地域として主張し、図們江のなかの「間島」を拡大解釈し、領土問題を起こした。
- 6) 周維楨(1880-1911)、字は幹臣、湖北麻城出身。1902年に張之洞より官費留学生として日本に派遣され、弘文学院速成師範科入学した。在学中、『湖北学生界』に、主君に忠義を尽くすことを批判する文章を掲載したことにより湖北官庁に官費資格を取り消された。帰国後、呉禄貞の助手となり、西北への考察、延辺での国境調査に同行した。また、呉禄貞とともに『調査延吉辺務報告』を編集した。1911年11月7日呉禄貞とともに石家莊駅で部下に殺害された。李恩榮(生没不明)は、1907年延辺と朝鮮との国境調査に際して呉禄貞に同行し、6人の実習生を指導して実地測量をし、50万分の1の『延吉辺務專図』等を作図した。
- 7) 『調査延吉辺務報告書』(吉林官書刷印局、戊申(光緒34年、1908)4月)は全9章、38節から構成されている。しかし、第9章「日人越境之挙動」の下には「暫闕」と書かれている。付録には50万分の1の延吉地図も載っている。また『延吉辺務報告』、『調査延吉辺務報告』もある。吉林師範学院古籍研究所李澍田主編『光緒丁未延吉辺務報告・延吉庁領土問題之解決』(吉林文史出版社、1987年7月)と『延吉辺務報告』(吉林省図書館より出版したガリ版、1960年)、および沈雲龍主編『延吉辺務報告』(近代中国史料叢刊第三十二輯、台湾文海出版社)は、光緒戊申(1908年)奉天学務公所再版刷印の『延吉邊務報告』より復刻されたものである。章は表示されるが、節は書かれていない。周維楨が書いた「跋」もほとんど載っていない。この『延吉辺務報告書』は4つの版があるが、それぞれ異なる箇所がある。それについての検討は別の論文にしたい。
- 8) 1909年9月4日(宣統元年七月二十日、明治42年)清国外務部尚書梁敦彥と日本駐華公使伊集院彦吉が北京で「間島に関する協約」に調印した。その第一条に「日清兩國政府は図們江を清韓兩國の国境とし、江源地方に於いては定界碑を起点とし、石乙水を以て兩國の境界をなすことを聲明す」と書かれている。この「協約」の中国語の名は「図們江中韩界務條款」である。
- 9) 呉禄貞に関する伝記の代表的なものは以下のようである。錢基博『呉禄貞傳略』、中国社会科学院近代史研究所主編『民国人物伝』第2巻(中華書局、北京、1980)、趙宗頌・夏菊芳『呉禄貞』(上海人民出版社、1982年5月)、胡玉衡『九江処処蹄痕・呉禄貞傳』(近代中国出版社、台北、1982年10月)、皮明麻・虞和平・呉厚智編『呉禄貞集』(華中師範大学出版社、武漢、1989年)、呉忠亞「呉禄貞的一生」(呉忠亞・呉厚智著『百年呉禄貞』、湖北人民出版社、2011年3月)、安龍禎編著『愛国将領呉禄貞』(世界華人出版社、2009年9月)、安龍禎編著『磅礴精英呉禄貞』(中国国際図書出版社、2011年9月)、朱宏啓・安龍禎『呉禄貞傳』(中国国際図書出版社2013年9月)。
- 10) 『成城学校百年』(非売品、編集者：校史編集委員会、発行者：学校法人成城学校、昭和60年(1985)11月1日発行)「草創期 明治17年～大正5年 文武講習館創立から創立30周年まで」のコラム「明治陸軍と成城」に「成城学校の前身文武講習館は明治18年1月、京橋区築地3丁目11番地に誕生した」と書いてあるが、創立者、初代校長日高藤吉郎が書いた「自序に代へて」には、「明治17年11月7日成城学校の前身である文武講習館創立の許可を得、同12月25日東京市京橋区築地3丁目11番地に開校した」(雑誌『国民体育』(昭和5年5月号)に掲載)と書いてある。筆者は創立者の日高藤吉郎の説を取るが、判断は保留する。成城学校は戦後新制高等学校が新設され、成城中学校、成城高等学校と校名を変更し、現在に至っている。世田谷区にある成城学園とは異なる教育機関である。

- 11) 川上操六 (1848~1899) は、鹿児島出身。日本陸軍の軍人で、陸軍参謀本部次長、総長を歴任し、明治 31 年陸軍大将となる。1889 年より 10 年間にわたって成城学校第 4 代校長を務めたが、在任中、留学生部を創始、清国留学生教育を始めさせた。
- 12) 成城学校の陸軍士官学校予備校としての留学生教育は昭和 10 年代まで続いた。
- 13) 『成城学校百年』による。47 頁。
- 14) 張之洞『勸学篇』二・「遊学二」、苑書義・孫華峰・李秉新主編『張之洞全集』第 12 冊 (河北人民出版社、1998 年 8 月) 所収。原文は「至遊学之國、西洋不如東洋：一路近省費、可多遣；一去華近、易考察；一東文近於中文、易通曉」(訳：遊学の国と言えば、西洋は東洋に及ばない。一つには距離が近くて費用がすくなく、多くの者を派遣できる。一つには中国から近くて考察しやすい。一つには日本語が中国語に似ているからわかりやすい。-筆者) という。また、実藤恵秀『中国留学生史談』(第一書房、昭和 56 年 5 月) 33 頁も参照。
- 15) 韓国人留学生受け入れ中止の理由は次のように述べられている。「蓋し當時露西亞の勢力全く韓國を制するに及んで該國の我國に対する信誼自から失はれ留学派遣の事も中止されるに至りしものならむ。』『成城学校百年』による。309 頁。ここから朝鮮半島の植民地化がその主な理由だと考えられる。朝鮮人留学生を受け入れた背景と経過については、金明洙「旧陸軍士官予備校成城学校と 19 世紀末の韓国人留学生 - 「朝鮮の洪沢榮一」韓相龍を中心に - 」(『三田学会雑誌』104 卷 3 号、2011 年 10 月) を参照。
- 16) 実藤恵秀『中国留学生史稿』には、「両湖総督の張之洞がまず四名をおくり來り、六月に教育を開始した」と記されている。193 頁。『成城学校百年』に「6 月 2 日 (明治 31)、両江総督劉坤一の派遣せし、浙江省留学生四名の入校ありして 7 月 1 日よりその教育を開始せり」と記されている。また、中村義「成城学校と中国人留学生」(辛亥革命研究会編『中国近現代史論集・菊池貴晴先生追悼論集』、汲古書院刊、1985 年 9 月) にも「両江総督劉坤一」による「派遣」と書かれているが、外交文書などではほとんど「浙江巡撫より派遣」とされている。杭州領事館領事代理速水一孔より外務大臣男爵西徳二郎宛てた「機密第七号 浙江省より文武留学生等、遊歴官派遣の件具申」(国立公文書館アジア歴史資料センター、外交公文書 0056 号) によると、來日したのが全部 10 人で成城学校に入った 4 人の武学生の他、4 人の文学生 (錢承誌、仁和県学廩生、24 歳；陸世芬、仁和県学廩生、27 歳；陳槐、義烏県学廩生、25 歳；何煥疇、諸暨県監生、21 歳) もいた。遊歴員 (引率者) は 2 名、浙江省候補知県張大鏞、候補巡檢蔣嘉名が同行したという。筆者は 4 人の武学生は浙江巡撫より派遣され、4 人の文学生は両江総督より派遣されたものと推測する。
- 17) この四人の出身地、年齢の記載は外務省外交史料館の公文書や書簡によるものである。明治 31 年 (1898) 5 月 25 日杭州にある領事総代理速水一孔より外務大臣男爵西徳二郎宛の書簡に浙江省巡撫より 8 名の文武留学生を派遣し、その中の 4 名 (譚興沛、徐方謙、蕭星垣、段蘭芳) は成城学校に入学したと書かれている。また、氏名、年齢、出身地の他に徐方謙については「藍翎五品儘先把総」、蕭星垣、段蘭芳については「五品軍功」と書かれている。『清国留学生原籍簿』(第 1 号) (明治 32 年 10 月、留学生に関スル届書控) に譚興沛の「生年月日」や「外国における居所」は記載されておらず、「32 年 (1898) 7 月 28 日入居、32 年 10 月 3 日退学セラル、同 4 日帰国」と書かれているのだが、これは、つまり中途退学して卒業しなかったということか。また徐方謙の「外国における居所」として登録されたのは「湖北省江夏県」ではなく、「浙江省湖州府長興県泗安鎮」である。なぜこのように異なっているのかはわからない。
- 18) 「呉・孫事件」ともいう。成城学校入学の私費留学生身分保証がおりないため、留学生達が蔡鈞公使と衝突した事件である。日本内務省は日本の治安を妨害した理由で呉敬恒・孫揆均の二人を国外追放とした。このとき、呉敬恒は抗議の自殺を図るが助けられた。二人の国外退去により、留学生の間にはさらに抗議の運動が広がった。この事件をきっかけにして、成城学校は私費留学生や文科

生も受け入れるようになった。

- 19) 振武学校は1903年(明治36)から1914年(大正3)まで、清国留学生を対象とする陸軍士官学校予備校として機能した。それまで陸軍軍人を目指す留学生は成城学校に入学していたが、「成城学校入学事件」の後、日本政府と中国公使との協定により、新たな留学生を受け入れる学校を作ることになった。これが振武学校である。
- 20) 『成城学校百年』によれば、明治36年(1902)7月留学生受け入れを辞退するまで、明治31年(1898)以来満5ヶ年間で成城学校の留学生の卒業生は188名に及んだ。10月には清国公使楊樞の懇請で文学生班を開き、軍人志望以外の学生を収容すると、直ちに四川省派遣学生が10名、次いで20名と入校したという。52頁。
- 21) 呉玉章(1778.12~1966.12)、本名永珊、字は樹人。四川省榮県出身、教育家、政治家。1903年日本に留学、成城学校に入学した。幸徳秋水らの影響を受けて同盟会に参加。1911年帰国して榮県起義を指導、辛亥革命のさきがけとなった。1912年1月参議院議員、大総統秘書に就任。1913年反袁闘争のなかでフランスに亡命、帰国後1922年成都高等師範学校校長となり、1925年重慶中法大学を創建した。1949年以降中国人民大学学長、國務院文字改革委員会主任、全国教育工会主席、中国自然科学普及協会主席などを歴任・兼任した。著書、『中国文字的源流及其改革法案』、『中国新文字的文法』、『辛亥革命』、『呉玉章文集』などがある。
- 22) 呉玉章『辛亥革命-中国近代史における偉大な民主主義革命』(日本語)(北京外文出版社、1964年初版、1979年第2版)を参照。82~83頁。訳文は『成城学校百年』による。55頁。この本の中国語版は1961年9月の人民出版社発行によるものであるが、両者を比べてみると、日本語版には省略した箇所がかなりある。
- 23) 1899年5月、川上操六校長が逝去した。奥山三郎がその後校長代理となり、11月正式に校長に就任、1901年10月まで一年十ヶ月校長に在任した。その間にちょうど呉禄貞が在任していた。
- 24) この成城学校幹事長奥山三郎による、この「清国浙江派遣陸軍学生学術授業進歩景況報告」という資料は最初に使われたのが中村義氏の論考「成城学校と中国人留学生」(辛亥革命研究会編『中国近現代史論集 菊池貴晴先生追悼論集』、汲古書院、1985年9月)である。しかし資料の所在は明示されていない。筆者は2014年に成城中学校・高等学校の校友会・史料室でこの「報告」のオリジナルを見つけた。
- 25) 『日本留学中国人名簿関係資料』第6巻『日本陸軍士官学校・中華民国留学生名簿』、日本陸軍士官学校印・郭榮生校補、龍溪書舎、1975年8月。
- 26) 例えば、成城学校を卒業し陸軍士官学校に進学した第1期(1900年12月入学、1901年11月卒業)、第2期(1902年12月入学、1903年11月卒業)、第3期(1903年12月入学、1904年11月卒業)の卒業生の中には、呉禄貞、張紹曾、藍天蔚、蔡鏐、蔣方震(百里)、張孝准、許崇智等のような、後に辛亥革命で活躍した者がいる。
- 27) 成城学校に入った33名の清国留学生の中で湖広総督張之洞から派遣された者は19名(湖北武備学堂の生徒が10名、両湖書院の生徒が9名)である。
- 28) 例えば、朱広啓・安龍禎『呉禄貞伝』(中国国際図書出版社、2013年9月)、19頁。さねとうけいしゅう著『中国留学生史談』は張厚琨に言及した箇所がある。それは当時の『時事新報』に掲載された記事「清国留学生の現状及将来」からの引用である。「留学生中、高貴の出にして年齢尤も若きは張之洞総督の愛孫にして目下近衛公(近衛篤磨-筆者)の監督に属し学習院に在学せり。氏は居正風采全く貴族的にして才学も亦他に劣らず、学習院に在りても、一方には高級の学科を受け、一方には下級の教課を踏めることとて同学生に奇異の感を与ふることなきに非るも、総じて成績直しき部分に属するよし、目下貴族院議長官舎に住し」という。87頁。もう一つの証拠は張厚琨が自ら近衛公爵へ宛てた書簡(1901年1月7日)である。その中には「現自戊戌冬留学東邦屈指二

載既叩幘轡之愛、復推培植之誠。本期卒業而帰（中略）別後、中秋抵滬、月杪旋鄂、一路平安、無勞遠慮」と書かれている。この書簡の封筒に「敬頌 吉便帯至日本国東京 近衛公爵閣下 学習院学生張厚珉」と明確に記されている。もう一つの近衛公爵宛での書簡では、張厚珉は友人黄太守に「学習院各位先生暨諸同学」に「食物」を贈ることに言及した。李廷江編著『近代日中関係源流－晚清中国名人致近衛篤磨書簡』（社会科学文献出版社、2011年12月）による。126～127頁、422頁。

- 29) 国立公文書館・アジア歴史資料センターの公文書「外務省記録・在本邦清国留学生関係雑纂 陸軍学生部1」の番号0068、0069 公文書による。詳しくは外務省外交史料館・防衛省防衛研究より提供されるデジタルの歴史公文書（国立公文書館・アジア歴史資料センターのHP：<https://www.jacar.go.jp/>）を参照。
- 30) 同上の0071号、0076号の公文書による。後者には在上海の小田切総領事代理より青木外務大臣への電報であり、来日する「清国学生四十名、湖北及南京ヨリ到着シ一月十四日薩摩丸ニ搭シ神戸ヘ向ケ当港ヲ出発シ夫ヨリ汽車ニテ東京ヘ赴クベシ各学生中三十三名ハ軍事修業、四名ハ法学修業、二名ハ師範学校ヘ一名ハ学習院ヘ入学ノ計画ナリ、就イテハ同人等就学ノ為□メ必要ノ御準備アラシコトヲ請フ、野島書記生ヲシテ同行セシム」と記されている。その他、0077号、明治三十二年一月六日付の「機密第二号」、小田切総領事代理より外務次官都筑馨六に宛てた「張総督派遣ノ学生出発ニ関スル件」の書簡、0079号、一月十三日付青木外務大臣より桂陸軍大臣への書簡、0080号、都筑外務次官より参謀本部福島歩兵大佐への書簡、0081号、公信第五号、明治三十二年一月八日付の小田切総領事代理より外務次官都筑馨六への書簡等がある。
- 31) 「外務省記録・在本邦清国留学生関係雑纂 陸軍学生部1」の番号0084、0085号公文書による。0085号の名簿の中の「文華」の「華」の字はクサクカムリの下に、簡体字の「华」の字を付けている。朱宏啓・安龍禎『呉禄貞傳』には「文萃」と記されているが、ここで保留したい。
- 32) 「外務省記録・在本邦清国留学生関係雑纂 陸軍学生部1」の番号0087、0088、0089号の公文書による。浙江省出身の留学生章宗祥と富士英の渡日時期について、呂順長著『清末中日教育文化交流の研究』（商務印書館、2012年6月）は様々な考察を通じて光緒24年（1898年）2月という結論を出しているが、これは明らかに誤りである。南洋公学の学生は6人で最初東京の日華学堂に入り、その後それぞれ東京専門学校（後の早稲田大学）、東京帝国大学などの教育機関に進学した。楊蔭杭（1878-1945）と雷奮（1871-1919）は中華民国の初期の法律創立などに大きな貢献をした人物である。楊蔭杭は現代の著名な学者・小説家・翻訳家でもある楊絳の父親である。
- 33) 1899年1月7日に20名の湖北留学生と引率者である鄭国華が便船にて漢口から上海に向けて出発した。その便船は招商局汽船「江裕号」である。神谷正男編『宗方小太郎文書－近代中国秘録』（昭和50年、原書房）による。46頁。
- 34) 「牛込」の冠称は1911年廃止。後に「市ヶ谷薬王寺前町」となる。現在の「市ヶ谷薬王寺町」である。
- 35) 明治32年3月4日付の参謀本部第二部長福島安正より外務省政務局長康成への公信（「外務省記録・在本邦清国留学生関係雑纂・陸軍学生部1」の番号0111号）による。
- 36) 注35「公信」の別紙1と2、「外務省記録・在本邦清国留学生関係雑纂・陸軍学生部1」の公文書0112号、0113号による。
- 37) この「清国陸軍学生四拾五名教授学術課程表」の最後には生徒数、入学時期、修学年月数が載っている。生徒数は明治31年（1898）6月20日に入学した者が3名、32年1月20日が33名、32年3月21日が8名、32年5月1日が1名の、計45名である。修学年数は入学の時期によってそれぞれ異なるが、同一の課程を受け、同様の教材を使った可能性がある。
- 38) 「清国陸軍学生四拾五名教授学術課程表」の中には「清国学生一年半教育学科配当授業回数表」と

「清国学生教授学科目程度表」と違ったのは「幾何学」、「生理及衛生」、「典令教範」などがある。授業回数はほぼ同じであるが、備考欄に「授業回数ハ豫定回数ヲ掲ケタルモノニシテ実際ニ於テハ幾許ノ増減アリ」という説明もある。

- 39) 『成城学校百年』による。44, 45 頁。
- 40) 彼らが成城学校に入学してからちょうど2年になるが、退学した譚興沛を除いて三人の卒業成績の平均点は以下の通りである。蕭星垣 81 点、段蘭芳 72 点、徐方謙 72 点（段と同点）。中村義「成城学校と中国人留学生」（注 16 参照）では「清国浙江派遣陸軍学生平常品評点」と「清国浙江派遣陸軍学生一学年末学術評点」を紹介しているが、この「清国浙江派遣陸軍学生卒業試験成績表」には言及していない。
- 41) 明治 32 年 3 月 10 日付の在上海総領事館代理一等領事小田切萬壽之助より外務次官都筑馨六宛の公信第 78 号「北洋派遣学生出発ノ件具申」の付録（別紙）には 3 月 21 日に来日した武備学堂学生 8 名の氏名として、張鴻達、李士銳、蔣雁行、張紹曾、賈寶卿、陸錦、李澤均、王廷楨が載っている。42 名の中にもう一人私費留學生がいる。その留學生は 5 月 1 日に来日した汪汝瑩である。明治 32 年 4 月 7 日付の在上海総領事館代理一等領事小田切萬壽之助より外務次官都筑馨六宛の公信第 113 号の付録に同行した 9 人の名簿がある。そのなかに汪汝瑩の名前がある。彼は成城学校に入学した際、汪樹璧という字で登録した可能性がある。成城学校に保管された「清国留學生原籍簿」と「清国陸軍学生卒業試験成績表」には汪汝瑩ではなく汪樹璧の名前が見える。
- 42) 『現代支那四百餘州風雲児』の奥付に著者「増本義敏」と書いてある。この本は明治 44 年 11 月 20 日印、明治 44 年 11 月 23 日発行で、呉禄貞が 11 月 7 日に部下に殺害されたばかりの時期の刊行であるが、この件について触れている。「呉は又政事家的手腕家で、軍政長官の資である、先年間島問題では大に鳴らしたものである、(中略)と書いて居ると、号外飛来し、報じて曰く、呉禄貞は部下兵士の為めに殺害されたりと…」という。呉禄貞の成城学校での話は当時新聞などの報道によるものの可能性がある。91～92 頁。
- 43) 「外務省記録・在本邦清国留學生関係雑纂・陸軍学生部 1」の番号 0202～0205 号による。
- 44) 附録の名簿に 44 名の名前が載っている。傅慈祥の名前も載っていた。実は 1900 年 8 月 8 日（旧暦 7 月 14 日）に大通蜂起に参加した傅慈祥はその後、逮捕され、8 月 23 日に殺害されている。しかし、東京までそのニュースがまだ届かなかったため、傅慈祥の名前が残っていたものと推測する。
- 45) 「外務省記録・在本邦清国留學生関係雑纂・陸軍学生部 1」の番号 0206～0208 号による。
- 46) 成城学校の第 2 回清国留學生卒業成績表のなかに私費留學生の汪樹璧（汝瑩）の名前があるが、陸軍士官学校に入隊・入学申請名簿には彼の名が見えない。一方、卒業成績がなく、「疾病缺課日数」74 日と書かれている徐傳篤の名は見える。
- 47) 「清国留學生原簿」に「洪基、明治 33 年 8 月 31 日病死」と書かれている。
- 48) 『呉禄貞集』、258～259 頁。
- 49) 「外務省記録・在本邦清国留學生関係雑纂・陸軍学生部 1」の番号 0288。
- 50) 「外務省記録・在本邦清国留學生関係雑纂・陸軍学生部 1」の番号 0286、0287。
- 51) 「近衛聯隊の名簿」には、杜鍾岷、徐傳篤、田呉昭の名前が載っているが、成城学校を卒業して陸軍士官学校に入っていないか、陸軍士官学校を卒業することができなかったか不明である。
- 52) 『呉禄貞傳』（朱宏啓・安龍禎著）に「1902 年 5 月、日本士官学校の第 1 回の卒業生が帰国し、湖北より派遣された 20 名の官費留學生、庚子の乱によって遭難された傅慈祥を除いて全員が帰ってきた。その 19 名のうち、張之洞の一番上の孫の張厚琨もいた」（74 頁、筆者訳）と書かれているが、帰国の時期、人数、張厚琨もいたことは誤りである。また、傅慈祥の死は「庚子の乱」によるものではないことを指摘したい。